

## 連載 患者目線の医療安全 11

「患者のための病院」か「病院のための患者」か  
—病院長に求められるリーダーシップとは

患者の視点で医療安全を考える連絡協議会 世話人 勝村 久司

## 波紋を呼んだ群馬大学医学部の同窓会誌

2019年12月発行の群馬大学医学部の同窓会誌に掲載された、群馬大学医学部附属病院（群馬大学病院）の病院長の文章が物議を醸し、複数の新聞でも報道されました。

その内容は以下のようなものです。

まず、「2014年に発覚したいわゆる『外科手術後早期死亡多発問題』以降約5年が過ぎ、2019年4月に特定機能病院、同年7月に都道府県がん診療連携拠点病院に復帰できた。この5年間はこれだけを目標に努力し、それが達成できた」という主旨の書き出しで始まっています。

そして、問題となった執刀医と診療科長について、「彼らは決してずさんな診療をしていたのではなく、手術を希望して受診した進行がんの方のご希望に応えるべく努力し、また病院の経営に寄与するつもりであったことは私が知っています」と記し、最後は、「4年間にわたる収入減と保険監査後の自主返還金問題など、経営面での後遺症はまだまだ大きなものがありますが、今後もレベルアップをめざして取り組んでまいります」で終わっています。

この病院長の文章を読み、病院の再生を願っていた医療事故被害者の遺族たちは不安を感じ、真意をただす文書を送付したということです。

そのことを知った病院長は、群馬大学医学部同窓会のホームページからこの文章を削除し、同ホームページに以下のお詫びを掲載しました。

「この寄稿は、附属病院の意識・風土の改革が求められることやガバナンスに欠けていたことを強く反省し、安心安全な病院として再生するために実施してきた改善・改革の状況を、群馬大学医学部同窓会会員の皆様にご報告するために掲載させていただいたものです。しかし、病院長として本意を伝えるためには不適切な表現もあり、これをお読みいただいた方に不快な思いを抱かせてし

まいりました。大変申し訳ありませんでした。この寄稿につきましては取り消しをさせていただき、深くお詫び申し上げます」

## 病院の再生を願う遺族らの思い

群馬大学病院は、第三者委員会による医療事故調査報告書の提言を受け、2018年6月から被害者遺族2名も委員として加わった「患者参加型医療推進委員会」を設置しました。

そこでは、電子カルテの患者との共有やカンファレンスへの患者参加など、事故の再発防止に向けた改革に取り組んでいることが公表されました。特定機能病院への復帰には、そのような取り組みなどが評価されたに違いありません。

それだけに、遺族らからは、「病院長が、一連の事件の本質を理解していない上に、考えが変わっていないのは悲しい」「これまでの取り組みは特定機能病院の再承認に向けた単なるパフォーマンスに過ぎないのではないか」という主旨の声が病院に届けられたということです。

また、今回の病院長の文章に対する違和感や不信感は、新聞報道を見た複数の医師や看護師ら、医療関係者からも、私の元に届いています。

病院長は「患者のための病院」のリーダーシップをとるべきです。「病院のための患者」ではありません。そういう誤った価値観は、医療事故など、患者にとって不本意な医療につながってしまいます。そのような背景で起こる被害をなくしてほしい、というのが遺族の願いです。

患者一人一人を何より大切にす価値観を発信するリーダーこそが、患者だけでなく、医療者からも待望されているのではないのでしょうか。

さらに、国立大学の病院長には、そのような価値観で行われる医療の実践こそが、経営の安定につながるように国に働きかけていくくらいの気概を持ったリーダーになってほしいと願います。